

作業と身体の現象学 統合失調症者の精神病理を手がかりに

田 口 修

日本福祉大学 健康科学部

Occupation and Phenomenology of the Body A Consideration based on Psychopathology of the Schizophrenia Patients

Osamu Taguchi

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

Abstract: This article considered possibility of the recovery in the occupational therapy of the Schizophrenia Patients by paying its attention to the phenomenological embodiment. In consideration of the concrete psychopathology and problem of the Schizophrenia Patients, I examined importance of the foundation and a possibility of the treatment of the Occupation transcendental composition based on phenomenological analysis about the Carpenter Saw Activity.

Keywords: 精神障害作業療法 psychiatric occupational therapy, 間身体性 intercorporeality, 共同性 collectivity, 自明性の喪失 Blankenburg's Loss of Natural Self-Raising, 回復 recovery

1. はじめに

統合失調症のある女性患者を紹介する。普段は口を開くことの少ない物静かな女性は、手芸活動の一つとしてスカートを作るが、作業療法士である筆者に声を掛けてきた。「変なことを言うようだけど、針に糸が通ったのです。なんだか嬉しくて。なんというか、できたのです。今までできなかったわけじゃないけれど、今までそうじゃなかったんです。うまく言えないんですけど、先生に伝えたくて」率直に言い寄るその表情と声の弾みに、本人を悩ます病的な症状や自閉の世界とは別のなにかを伝えようとしている様子が伺える。今までのそれが不在であったことに気づき、今の充実を喜びとして実感しているようである。女性は洋服をもともと作ることが出来るし、糸と針の扱いに作業遂行上の問題はないため、出来ないことが出来るようになったという行動・スキルの達成を

訴えているわけではない。針と糸という道具を介して女性は何に出会ったというのだろうか。女性が手芸活動を通して体験したものとはなんであろうか。

本論文では、精神障害領域の作業療法の実践を通して見出された作業活動について身体的な現象学の視点から捉えることを試みる。この場合の身体とは、例えば生理学や解剖学の対象としての身体でもなければ、客観的な身体と二分された精神機能について評価するのでもない。物事を遂行する際、健全な生活にあっては意識されることのない「私はできる」ということ背景にあるものについて捉えるのである。作業療法は、人のからだと物や道具、そして環境との関係に注目し、人を行為し活動する存在として捉えることを基本としている。一人の患者の生きる姿からくる喜びや苦悩、意味や価値について、決して見逃しているわけでは無いものの、客観的な把握

の行間に忍ばせているのが現状である。しかし患者の生きられた世界を見つめ共感のまなざしを向けることなくして作業療法の実践の可能性は開かれることはない。「最初の哲学的な行為とは客観的世界のてまえで生きられている世界へと立ちかえるものとなるだろう¹⁾」とは現代フランスの哲学者モーリス・メルロ=ポンティの言葉である。身体を問題にするということは、「知覚する主体と知覚される世界¹⁾」の両者を問題にすることであり、身体とは「世界に対する私の視点¹⁾」であって世界が開かれることを可能にする視点である。このような意図のために、作業を通して行為し活動する身体を現象学的な観点より取り上げ検討してみたい。そうして、精神領域の作業療法について語る事が出来るようになるのではないかと考えている。

本論文では統合失調症者の具体的な病理と課題を示した後、具体的な作業活動の実例を挙げながらメルロ=ポンティの指摘を取り上げ、作業療法を通じた現象学的な身体への着目の可能性、及び統合失調症者の作業療法における回復の可能性について述べたい。

2. 作業療法と作業

作業療法はリハビリテーションの一分野として医療保健福祉領域に位置づけられ、手工芸活動や日常生活活動の訓練、学習活動を通して機能を回復し障害を軽減する。患者にとって有用な物や道具を取り扱う機会を工夫し提供することを通じて、生活上の様々な困難を軽減し、諸活動の能力を改善し、そうして家庭復帰や就労といった社会参加を支援することを目指している。そうしてリハビリテーションの理念である全人的回復²⁾を図ることを目的としている。

このとき作業療法では作業を治療の手段として用いる(なお臨床的に用いる作業は、活動アクティビティと呼ぶ場合がある)。患者の暮らし・生活上における困難に対して、治療手段としての作業を用いることで、治療・援助の方法とするという大変ユニークな方法論を作業療法は採用している。そして適切な治療・援助を展開するためには、対象者の状態像の把握はもちろんのこと、作業そのものが人や環境に与える影響を分析し理解する技術が必要となる。そうして患者に作業を適切に処方することができるようになる。

このような手段や方法としての作業に関して、精神障害領域の作業療法の第一人者である山根寛は、次の9つ

の作業の目的や役割について指摘している³⁾。

能動性. 中枢神経系の作用を高め、意志の働きを生じせしめる。

身体性. 心身の諸機能を賦活し、快の情動を高める。

操作性. 素材、道具を用いることで試行錯誤の体験をもたらす、自己能力の現実検討を図る。創意工夫の体験を通して有能感の現実的実現をもたらす。

具体性. 制作の過程と結果が明らかであり、いま・ここでの体験を促す。また他者との関りの機会や治療援助の機会をもたらす。

目的性. 作業の目的は意欲や自発性を引き出す。

意味性. モチベーションを引き出し価値を見出す。

投影性. 制作物は非言語的メッセージな自己の気持ちが表れ、自己洞察の機会となる。カタルシスの機会をもたらす。自己愛充足の機会となる。

没我性. 没頭し夢中の状態を指す。苦しみを癒す力をもたらす。

共有性. 他者との共有体験や対人交流を促す。

このように作業の目的や役割について一覧となったものが提示されているが、これらは運動学、神経学、心理学、精神分析学等の知見を参考にしながら臨床経験の多様さを反映しつつまとめられたものである。しかしその多様さのためであろうか、一貫性に欠ける記述であるのは否めない。山根の提示の如く、作業の目的や役割が、それとして意味を生じせしめるような基盤をなす現象学的な身体のあるかたについて捉える必要がある。

3. 統合失調症者の精神病理

精神科の臨床において多数を占める患者は統合失調症者である。彼らのすがたを捉えることで、現象学的な身体と作業に着目することの重要性を把握してみたい。

3-1. 臨床観察における統合失調症者の姿

毎日の生活というものは、起伏と濃淡の入り混じった彩りのある、停まることのない緩やかなリズムや振幅であることを彼らは知っている。しかし自分の感受性や判断を自分の外側に合わせて、外在的に整えることに気遣いの大半を費やしている。時間は自分のものではなく目の前をただ通り過ぎてゆくのであり、寄る辺の無い普通の暮らしというものを運命として受け入

れようとしている。

しかし多くの方は、歩みを止めることをしない。苦慮しつつ、それぞれにがんばろうとしている。だが苦しみに抗しきれず自失し、やがて歩みを止めてしまう人々がいる。毎日のリズムは途絶え、リズムのなかに含まれていた命綱を失う。ちょうど建物の土台である基礎が崩れ、同時に構造柱が倒れてしまうように、自我とその同一性は瓦解して時間と空間がないまぜになってしまう状態に陥る。崩れた家の無い壁に絵を飾るような、あるいは床の無い居間で寛ぎを得ようとするようなものがきに直面する。私をこの世に位置付け、私が私であることを一瞬一瞬に保証してくれていた私の身体があてにならなくなる事態を迎えて、私は私自身の身体から疎遠となってしまうのである。

前後上下左右、ここ、そこ、向こう、手前、あちら、こちら、あるいは手順、予想、決断、経過、結果といった時間空間の文節（時間のながれや、物事の展開）という、行為する身体の働きであった時空間の構成（perspective）は変調を来し、私 - あなた - みんなという人称的世界は乱れよめく。私やあなた、みんなが、今までもこれからも同じであるということの基盤、つまり身体の同一性を失う。周囲の人々や品々、物事の諸連関である世界は、立体性や構造的性を失い、対物関係や人間関係は、距離感を失って間合いを喪失する。世界をそのように立体的で視覚的なものとさせていた構えや基盤そのものから、撤退を余儀なくされてしまうのである。

身体を離れることは、身体が位置していた社会から疎遠となることを意味する。そして世界の中で、今ここに座を占めて（being occupied）生活し、身体を通してつながっていた共同体という場を失うことでもある。私達にとって当然でなじみのある有的な世界とは別の、無的な不安の只中に放り出され、孤立の淵に立たされる。

虚無となった身体は、親しみや温もりを喪って浮遊し、実体の無い自分は表象のみが漂う。共同体やみんなの知恵の集積であった常識（common sense）は、当然で自明ではなくなり、ひとつひとつ確かめなければならなくなる。自分の指、手、腕、体幹は動かそうにもぎこちなく、私の身体は慣れ親しんだ自分自身ではなくなり、動かさなければならぬ、こなさなければならぬ、よそよそしい対象になる。何でもなかつ

た身の回りの衣類や道具といった品々も、やはりこなさなければならぬ物となり、よそよそしく物が自分という者を見つめる。身近な人も異質な風貌となり、他者のまなざしに被爆するかのごとく困惑し、次第に私を躓にすることのない埋没へと沈下する。自閉は他者との最後の適応手段となるが、遠く退いた身体のもとでは、不安定で緊張状態となるか、もしくは妄想という虚妄の建築にて、文脈を欠いた片寄りのある精神医学的振る舞いへと症状化する。

身体を離れた自分は、自らの時間性や歴史性を、つまり自分自身が人生のストーリーを紡ぐ存在であったことを取戻すべく、理由や意味を問わずにはいられない。誰かにこの苦しみを理解してほしいと心底願うが、身体を離れたために、からだに根差した実感や手応えはあまり役に立たず、言葉がむなしく宙に浮き、語ることを喪失する。

しかし、やがて抑うつ的に疲労を感じ、深く眠りたくなるのなら、身体を取戻す兆しが現れたのかもしれない。過酷な状況を被る身体の素直な感覚だからである。多くの患者は、この抑うつと疲労に向かうあたりの、その前後から作業療法が始まる。

このように統合失調症者の問題とは、私が依拠する身体からの疎遠に伴って、私の居場所を、つまり身体という場を喪失することにあると考える。行為し活動する身体の構成（perspective）の変調によって、手応えや実感を失い、生き生きといきる生活の喪失を迎えることに問題があると考える。統合失調症者が直面する苦悩や不安は、それまでには我知れず在ったのに失ったがために、その大切さと再獲得の困難を経験するところにあるのではないだろうか。

3-2. 自明性の喪失

～統合失調症の女性アンネの場合～

精神病理学者のブランケンブルグは著書『自明性の喪失 分裂病の現象学』⁴⁾において、統合失調症の女性患者アンネ・ラウの事例を取り上げている。アンネは次のように発言している。

「ほんとおかしなことなんです。そんなこと以前の問題なのです。うまく着こなせない人とか、自分にはセンスがないと思っている人はたくさんいます。でもその人たちもそのことで悩むことは

ありません。私の問題は那些人たちに欠けているもの以前のことなのです……ふつうの人は生きて行く上でごく大ざっぱにしかその必要性を感じていないことと言ったら近いでしょうか。でもふつうの人はそれを大ざっぱに感じていれば、それでそれを持っていることになるのです。それで(きちんと知らないことでもすべて)つじつまを合わせることができるのです。だからどんなことでも問題にならなくなってしまうのです。ほかの人ともうまくやっていけるし、すべてがひとりではかどるようなことにもなるのです。つまりしっかりした感じをもつことができるのです。これが自然なことだし自明なことなのです。(絶望的に)これが欠けていると、実際生きていくことができません。本当にどうにもならないのです」

「なにか仕事をみんなでいっしょにすることになったとき、それが長続きしない、うまくゆかないのです。たとえば洗いのものなんか——むつかしいのは、なにがむつかしいかということ、どういったらいいのか——私にはそれがあたりまえのこととしてはできないのです。なにか変な感じなのです。無理をしてしなくてはならないのです。それで私の心がだめになってしまう。すっかりくたびれてしまいます。どんな仕事でもそうです。刺繍をするときとか——ただ仕事をしているというだけ——そういう物事だけしかなくて——私の心が伴っていません」

このようなアンネの困惑や絶望についてブランケンブルグは、「アプリアリとか超越論的構成とかいうことばで問題にしているものは、この「そのこと以前の」ということばが言い表している以上のなにもでもない。自然な意識にとってつねに隠されているはずの判断力の超越論的基礎が、ここでは明るみに出ている」、「アンネは、自分に出会ってくるものすべてに対して、——健康者とはまるで違って——いつもまず、それと出会うことができるための前提をつくっておかなくてはならない。健康者では前意識的な「受動的生成」の領域に属しているこの超越論的な営みは、彼女にとっては莫大な力の消費を意味している」、「ふつうの意味での体力の消費のほかに、それとはまったく別種の力の消費を必要とする作業をしなければならぬ」、「彼女のこの「作業」は超越論的性格を帯びたものだと思

う。なぜなら、彼女の場合にはこれに伴う力の消耗は、なによりもまず基盤を準備することに注ぎ込まれてしまうのに対して、健康者はそのような基盤を、程度の差はあれあらかじめ与えられている」と、以上のように説明している。

「私の問題は那些人たちに欠けているもの以前のこと」と切実に語るアンネの、いわば現象学的な発言には、超越論的構成における前意識的な働きの欠損が見てとれる。そして「自然なことだし自明なこと」として、これを心底欲する様子が伺える。健康者にあって当前で自然であることの前提をなすもの、あるいは世界とのつながりの基盤というべきものが欠けているために、通常の作業をこなすことが困難になるだけでなく、基盤を準備することに力を削がれるために無理を強いられ、途方に暮れ、しかし目的行為に達することなく、すっかり疲れ果ててしまう様子が見出される。

アンネの語った統合失調症における体験とブランケンブルグによる現象学的な説明には、身体の手応えや実感を失い、いきいきと生きる生活の喪失を迎えることの問題がよく示されている。統合失調者の置かれている状況や統合失調症者の直面する苦悩や不安は、健康者にとってはおのずと在るはずの何かを我知れずに失っているがために、その大切さと再獲得の困難を経験するところにあるのではないだろうか。

3-3. 身体が可能にする自然で自明な生活

例えば言葉や思考、行動が、次のそれへと時間空間的に展開し移行する際に導く働きを担うのは、何によるのであろうか。岐路に立たされ差し迫った状況下であるなら、主体的自我が明確な意志のもとに自己を選択することがあるだろうし、あるいは社会の組織的な役割関係によって、制度的な有言無言の指示に従うことがあるかもしれない。

しかし普通の生活とは、そのように自発的でもなければ受身的でもない、行くとはなしに毎日が過ぎ行くところに特徴があるように思う。合理的・機能的な価値基準というよりも、喜怒哀楽といった情緒や常識(common sense)が幅をきかせているのであり、人はこれを当然の感覚としている。今ここに居ることに何らの理由を求めず、その必要をあまり感じることもない曖昧さが生活らしいところであり日常態ではないだろうか。ポチポチいってみるか、という苦悩と希望

と諦観の入り混じった決まりをつけない姿が生活の姿だと思うのである。

統合失調症者は、このような周囲との関わりの自然で自明的な構えそのものを病んでいる。何でもなかった、あの普通の現実から遠ざかってしまったために、むしろかえって即物的な自発と受身に転じている。今ここにいることの原因を求めて止まないのであり、居場所を欲している。自分が自分であること条件など必要とすることなく、周りの人や品物と、ありのまま、共にいたいと願っている。統合失調症者アンネが訴えるように、在ったときには当然すぎて問うことの難しい生活の自然な自明性を欲するところに、統合失調症者のパトス(受動)的な、悩み・苦しみの源泉があるのではないだろうか。身体は、自然な自明性という生活の基礎や土台を成すことで、統合失調症者にとっては命綱になっている。そのように考えると、統合失調症者に対する理解と関わりは、この失った自然で自明的な生活を可能にする身体の回復に焦点を当てることが主題となってくる。その際、ブランケンブルグが指摘したように、健常者であって当然で自然であること的前提をなすもの、あるいは世界とのつながりの基盤をなす超越論的構成における前意識的な働き(受動的生成の領域)を、どのように身体のうちに取り戻すことができるのか、本論の冒頭で紹介した糸と針を介した手芸活動の女性患者の喜びのように、それはどのように可能なかが問われてくるだろう。

4. 作業 Occupation への着目

4-1. 活動 Activity を支える作業 Occupation

関連する諸領域に目配せしつつ、実践に努める精神領域の作業療法は、作業に注目することで統合失調症者の生活を治療援助している。様々な場面における機能的で人間的な作業を通じて介入し、作業療法士自身の関与によって、集団と環境を意図的に配慮しながら、作業を手段にすることで治療援助を行っている。作業療法士は作業を取扱いながら、この治療援助という営みを、作業療法と呼び、名称独占のもと制度的に保障されたものとしてこの名を呼び習わしている。

ここで改めて作業という用語について着目してみたい。作業という用語とともに、臨床では活動と呼ぶ場合がある。作業(Occupation)と活動(Activity)という二つの用語を、幅広く人間の行為一般の諸活動

を指すものとして、臨床では同時に使用しているのが現状である。両者の作業療法学上の定義の違いは未だ統一された見解は無く、ふたつを一括りにして作業活動と呼ぶことも多い。

作業(Occupation)は日常的な用語法において職業や仕事と訳されるが、occupyという語源に含意するように、人が必要なものを「占め、費やす」諸活動を意味し、何かに占められ、何かを費やすというあり方をしながら毎日を生きる人間存在のあり方を示すものとして、作業療法概念の思想性を宿している。ここから作業療法 Occupational Therapyにおける作業(Occupation)とは、病気などで障害がある人が、物や時間、空間を精神的・物理的に占め費やす諸活動を介することで生活を再建していくという、回復に向けた治療的・療養的な役割を担っている。

活動(Activity)とは文字どおり活動であり、目的指向的で、積極的、能動的に為すこと(doing)を目指し、治療援助において、意図的に操作・分析の対象となり、自立というリハビリテーションの要請に応えている。人間存在のあり方を示す作業(Occupation)に対して、活動(Activity)はより個別的で客観的な事象を示しているといえよう。活動(Activity)は、思想的な作業(Occupation)の自己実現として捉えられるような相補的な関係が両者のあいだにはあるのかもしれない。

活動(Activity)はしかしながら、先に示した統合失調症者のパトスの性向とはむしろ相容れないところがある。統合失調症者にとってまず大事なのは、何かを自発的、積極的、目的、意図的に為す(doing)というよりも、アンネが訴えていたように、ありのままに、共に、自然にいられること、この自然な自明性を取戻すことである。つまり存在すること(being)なのである。統合失調症者と作業療法士にとって、主題を活動(Activity)の側から考えるのではなくして、活動(Activity)を背後から支え、実現せしめるものとしての作業(Occupation)に即しながら考えることが重要になると思われる。

4-2. 潜在的な身体運動と共同性

活動(Activity)を支えるものとしての作業(Occupation)について検討するにあたり、精神科医師であり精神病理学者の加藤敏⁵⁾の指摘を取り上げたい。

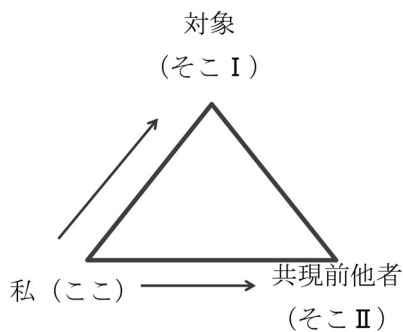


図1：潜在的な身体運動と共同性

加藤はメルロ=ポンティを引用しながら、作業活動に伴う「潜在的な身体運動と共同性」の現象学的かつ精神病理学的な理解の重要性について次のように指摘している（図1参照）。

「私がある対象、例えば立方体の物体を見る時、私は自分の体が位置している「ここ」から、立方体の箱のある「そこ」（そこ）へと赴く潜在的な身体運動を想定できる。フランスの現象学者メルロ=ポンティの次の言葉は、このような潜在的な身体運動を巧みに表現している。「まなざしはさまざまな見えるものを包み、触れ、それらと一体化する」。あわせて、私とともに、立方体の箱の別な面を見ているであろう他者（共現前他者）のいる「そこ」（そこ）へと私が赴く潜在的な身体運動を想定できる。この二方向への潜在的な身体運動により、立方体の物体は、厚みをもった、現実感のあるものとして知覚される。そうした潜在的な身体運動が障害されると、事物は現実感を失い、立体感もなくなってしまうことになる」。このように加藤は、多くの空間的地平、時間的地平が含まれる潜在的な身体運動の働きを図式化し示しているといえよう。

続けて加藤は、「他者のいる「そこ」（そこ）へと赴く潜在的な身体運動は、他者の観点に立つことに通じ、他者との連帯、絆の前提になる。人は、世界、他者へと開かれた存在であり、（中略）、潜在的な身体運動をもとに、世界、他者へと身を挺している態勢をとっている。リハビリテーションにおいて、このような私の潜在的な身体運動が重要な働きをしていることを確認しておきたい」と指摘する。

立方体を見ようとするとき、私のまなざしは常に対象の一面しか見ることはないのだが、「そこへと赴く」潜在的な自分がいるという。例えば、そこへと手を伸ばし触れようとするかもしれない手や腕の運動、触

れるに到ったときの対象物の姿の変化、対象物に関する私の過去の経験が、他方、そこに現前化する他者から見た立方体の眺め、他者の意見や感受性といった潜在的な関与が想定され、多くの空間的地平、時間的地平が知覚の展望には含まれている。潜在的な身体運動の働きと、他者との連帯と絆によって、「まなざす」という作業の成立基盤が与えられ、対象物と「触れ、それらと一体化する」潜在的な働き、すなわち厚みをもった現実感のある知覚を可能にしている。身体は客観的空間の一片断片ではなく、むしろ客観的空間を可能にするような二方向による潜在的な運動性において、かたち作られていくということが指摘できるだろう。世界へ他者へと潜在的な身体運動をもとに身を挺している態勢を身体は宿していると加藤が言うように、厚みをもった現実的な世界とのつながりの基盤をなす超越論的構成の働き（受動的生成の領域）を、潜在的な身体運動性は担っていると考えられる。

立方体の物体を見るという作業は、身体の潜在的運動の経験にもとづくことで実現する。加藤の指摘を踏まえると、何かに占められ何かを費やすという作業（Occupation）は、この多様な空間的地平、時間的地平を含む身体の潜在的な運動の働きを示すものとして理解できるのではないだろうか。人が物や道具と媒介しながら必要なものを『占め費やす』状況を表すものとして作業（Occupation）は捉えられるが、活動（Activity）として実現せしめるに至る、厚みをもった現実的な世界とのつながりの基盤をなす超越論的構成の働きを、作業（Occupation）は担っていると言えるのではないだろうか。occupyという語源に含意され、時間や空間に占められ費やされているものの正体は、黙したまま潜在的に活躍する身体の働きを指すものとして考えられてくる。

一方、加藤は「潜在的な身体運動が障害されると、事物は現実感を失い、立体感もなくなってしまう」として潜在的な身体運動の喪失や欠如態を指摘している。これは統合失調症者のアンネが示した自然な自明性の喪失という精神病理と重なるものとして理解できるだろう。第3章3項の末尾で指摘したように、健常者にとって当然で自然であること的前提をなすもの、あるいは世界とのつながりの基盤をなす超越論的構成における前意識的な働き（受動的生成の領域）を、どのように身体のうちに取り戻すことができるのかと問うたが、

超越論的構成を担う作業 (Occupation) は、したがってその回復の手がかりや可能性を秘めていると言えるのではないだろうか。アンネの場合、なによりもまず自己の成立基盤を準備することに多くの力を注ぎ込んでしまい消耗し疲れ果ててしまうのだが、このような無理強いに終始するのではなくして、冒頭で紹介した糸と針を介した手芸活動の女性に到来した喜びのように、メルロ=ポンティの言う「まなざし」を如何にすれば得ることができるのだろうか。加藤の言う共現前他者を見出すこと、すなわち絆や連帯といった共同性は、どのようにして可能になるのだろうか。「リハビリテーションにおいて、このような私の潜在的な身体運動が重要な働きをしていることを確認しておきたい」と加藤が言うように、統合失調症者に対する自然な自明性を回復する作業 (Occupation) を模索し着目していく必要がある。

5. 木工・ノコギリ活動と現象学的な身体

5-1. 木工・ノコギリ活動に取り組む統合失調症者の事例

ここで筆者の担当した統合失調症者の事例を紹介したい。彼は30代前半の男性である。20代前半で発症し、初回入院後は外来にて通院し、症状安定し、自宅で自営業の手伝いを行いながらひっそりと暮らしていたが、数か月前より家族や物に当たりちらし易怒的となり、深夜大声で叫び意味不明な発言を口走ることが増え、焦燥をあらわにし、不安定な状態に至ったため2回目の入院となった。入院後は脈絡のない行動や奇妙な仕草が顕著であったが、次第に落ち着きを得はじめ、寛解期前期と言われる状態、すなわち顕著な疲労、行動の抑制、意欲の低下、集中力の無さ、臥床傾向、自閉傾向がみられるに至った。入院当初の脈絡の欠いた会話や振る舞いは消えるが、平静時以上に寡黙となり、むしろからだの身振りや仕草は止んでしまったかのような様子となった。この寛解期前期は心身の回復へ向け必要不可欠な経過であり、この時期を焦らず、丁寧に見守ることが回復のために重要と言われている。そしてこの時期より作業療法は開始された。

作業療法導入当初は、心身への負担を考慮し手芸活動を試みるが、さほど手に取ることはなかった。つぎに木材を用いた小さな花瓶台作りとして簡単なノコギリ裁断をすすめたところ、手を止め休みながら取り

組む姿が見られた。ノコギリの扱いや木材の抵抗に当初はやりにくさを感じていた様子であったが、断続的に取り組み始めた。次にコースター作りの名目で径10センチほどの丸太を切り取る工程では、個数を数え、切り取る回数が増し、持続して取り組むに至った。それに伴い、ノコギリに向かうからだの姿勢が整いはじめ、「なかなか……手ごわいですね」「いくつできたかな」とのコメントがみられるようになった。次第にノコギリで木材を切ることが作業療法での取り組み方として定着し、そして毎日の療養生活の日課となり、周囲の職員や患者からは、ノコギリ職人、ごくろうさんと声を掛けられるようになり、本人もまんざらでもない笑みを浮かべるようになった。作業療法開始後3か月後に簡単な本棚作りにチャレンジし、設計図や材料の準備を行い、額に汗する様子がみられ、文字通りノコギリ職人へと勤しむ姿がみられた。4か月後、退院の運びとなり、外来にて作業療法を継続し利用しているが、入院前のもので静かな以前の印象に加え、笑顔と声の張りが増したように感じられた。

5-2. ノコギリでの木材裁断場面の観察

～現象学的分析～

この男性に対するノコギリ活動の作業療法の目的と導入は、手工芸という繊細な素材を扱うものであるよりも、衝動性の発散による心身の内外の刺激の調整という、精神医学的かつ精神力動的な判断によるものであった。手元の慎重な取り組みから、次第に毎日の生活のリズムを作り、精神医学的な状態像の改善のみならず、笑顔にみられるような前向きな姿勢・生活への態度作りに貢献したノコギリ活動は、自然で自明的な生活を可能にする身体の回復に関して、立役者の役割を果たしたと考えられ、注目に値するものとする。そこで症例がどのように木工・ノコギリ活動に取り組んだのか、現象学的な観点より記述してみたい。

作業台に木材を載せる。のこぎりの刃先を確認、
“よし切るぞ”。

のこぎりの柄を握りしめ、開始する一点に意識を向ける。

刃先をあてがい、軽く押す。採寸した直線と刃の体勢の一致を確かめながら、そろりと引く、すぐに戻してさらに引く。

木くずの噴出，ギーコーという音，刃先から伝わる木材内部の感触，からだの踏ん張りと緊張。

これらを次第に知覚するにしたがい，机，木材，ノコギリ，手，腕，肩，体幹は一体となって，振幅の度合いを強める。

振幅は次第にリズムとなり定型化する。

切るぞという当初の思いや意志は，定型化したフォームと止まらぬ振幅の勢い，木くずの繊細さによって，永遠に続くかのごとく錯覚の中にまぎれ込む。

“……自分が切っているのか，仕向けられているのか……”，という専心・没頭のなかで，ノコギリや身体はリズムそのものへとかたちを変える。

やがてノコギリ音の変化や切断面の増加によって終了の予感が与えられると，永遠性の錯覚と没頭から覚め，振幅の度合いは低下し，リズムやフォームは破られる。

終端部に達し切り終えたとたん，からだは一気に弛緩し，机，木材，ノコギリ，手，腕，肩，体幹の連関性や一体性は解消し，道具はもとのそれに帰る。

手や腕，肩も，反復の余韻と疲労感を伴いながら，普段のからだの一部に戻っていく。

6. 木工・ノコギリ活動と実存的な身体

当初，自分のもとで配慮を重ね自分に帰属していたはずのノコギリ作業が，工程が深まるにつれ，あたかも仕向けられ，させられているような錯覚を抱いているかのような振る舞いへと転調する。メルロ＝ポンティならば，これをどのように捉えるだろうか。次のように説明を試みたい。

交差配列 (キアスム)

このような主体・主観と客体・客観の反転の契機についてメルロ＝ポンティは 交差配列 キアスム⁶⁾として捉えるだろう。「それは，見えるものの見る身体への，触れられるものの触れる身体への巻きつき，「見るものと見えるもの，触れるものと触れられるものが互いに鏡のように映し合うこの二系列，こうしたものが，私の当てにしうる緊密に結ばれた一つの系をなしている」としてメルロ＝ポンティは述べている。身体各部分の主体の側と，机，木材，ノコギリとい

う対象の側の二つの系が，切るという意味にむけて，緊密に巻きつけられたひとつの系を生むというのである。掴んで動かしていたはずのノコギリは，ノコギリによって掴まされ，突き動かされ，男性は自発性を引き出されていく。木くずの噴出とともに木材の内部の抵抗は，負けじと身体各部の結びつきを一層強める。そうしてノコギリ動作は実現されていく。こうして主体の側が操作し働きかける客体との一方的な関係ではなく，主体と客体が解消する体験のなかに，超越論的構成における前意識的な働き（受動的生成の領域）を再獲得する契機が見出されるのではないだろうか。冒頭に示した糸と針を介した手芸活動の女性は，一つの系を見出す幸運に恵まれたのではないだろうか。

根源的なひとの経験

また，私もモノとも，あるいは他者とも言えないような経験を味わっているが，これは根源的なひと⁶⁾の経験であるとメルロ＝ポンティは指摘するだろう。それは私である自分が物や道具を対象として客観的に見たり関わったりということであるよりも，感官をつうじて物や道具といった事物と直接触れあっている事態である。私は始めから存在していたわけではなく，ノコギリ活動を経ることによって，ノコギリを切る私が定立 (being occupied) するのであって，動作をする前から，私が単独で存在するというわけではない。私の構成の後にノコギリが構成されるのではなく，両者は同時に生じるということの意味している。これは，私と他者との共現前へとつながる身体の潜在的な働きにつながると指摘した加藤の知見につながるものである。

専心・没頭 (preoccupation)

根源的なひとの経験は，私という意識や個人の認識，他者との関係や繋がり基礎を与えている。先に世界とのつながりの基盤をなす前意識的な働き（受動的生成の領域）を，どのように身体のうちに取り戻すことが出来るのかと問うたが，ノコギリ活動は，この前意識的，前人称的な身体経験をもたらしている点で，大きな可能性を秘めていると言えるのではないだろうか。アンネの場合は，なによりもまず受動的生成の領域である基盤を準備することに力を注ぎ込んでしまい，消耗し疲れ果ててしまうのだが，男性の場合

はこのような無理強いに終始することはなく、むしろノコギリ活動を見出すことに恵まれた。また手芸活動の女性は、糸と針を介して「できた」幸運に恵まれた。自然な自明性を回復するに至る作業 (Occupation) に向けて、手掛かりとなるのは、“……自分が切っているのか、仕向けられているのか……”，という専心・没頭が大きなヒントになる。「受動的生成」の領域を醸成するためには、「専心・没頭」あるいは「夢中・無心」という体験が示唆されるのではないだろうか。アンネにおいては、ノコギリ活動に伴ってみられたリズムそのものの経験を、自身の活動に見出しうるか否かにあるのではないだろうか。なお夢中という言葉は英語では preoccupation と記すのは、この前意識的、前人称的な身体を経験をもたらす作業 (Occupation) との関係を示しているのかもしれない、大変興味深く思われる。

身体の場所性

身体は、私に属している (主体、主観、能動) と同時に、外界 (客体、客観、受動) とも連なるあり方をしている。身体は皮膚で覆われた生理解剖的な形態や機能にとどまらず、物や道具、他者とつながり、そして、ひとつの存在である。それをメルロ＝ポンティは「肉⁶⁾」と呼んで、身体現象学から肉の存在論へと身体を捉えている。このことは肉の存在論によって共同体は、身体を通して結びつき形成されることを示している。「身体運動は、他者の観点に立つことに通じ、他者との連帯、絆の前提になるのであり、人は、世界、他者へと開かれた存在であり、潜在的な身体運動をもとに、世界、他者へと身を挺している態勢をとっている」と加藤が指摘⁵⁾していたように、私や物、他者は、運動志向的にそのつど結節され定位され、私の身体は物や道具、他者といった世界との結節の場所として、身体の場所性を示していると考えられる。このことは、今ここに座を占めて (being occupied) 生活し、身体を通して触れあっている共同体という場を回復することを課題とする統合失調症者の作業療法にとって、作業 (Occupation) それ自体のうちに共同性を回復しうる機序を示すものとして重要になるのではないだろうか。

共同性・歴史性の回復

一方、道具と共同体との関連について菅野⁷⁾は、「メルロ＝ポンティはハイデガー哲学における世界内存在としての人間の概念を『知覚の現象学』で世界内属存在と呼んでこれを継承した」と指摘している。

「ここでメルロは、現存在が周囲の世界で出会う存在者の主要なカテゴリーを二つ挙げている。一つは道具であり、もう一つは言語である。この「道具」はハイデガーが「手元にあり用いられる存在」と呼んだものに相当する。道具というものは、「それぞれが単独に存立するのではなく、他の道具と関連する全体のなかでそれぞれの位置を占めている。しかもこの道具的連関は全体として私が制作したものではなく、他者がつくったものである (もちろん私が制作した道具がこの連関に追加される場合もあるが)。とすると、現存在は単独の自我なのではなく、この道具的連関を介していつでもすでに他の現存在とともにある存在であり、他の現存在とこの世界を共有する存在にほかならない。ハイデガーは、こうして、現存在がすでに共同性を体現する共同存在であることを明らかにする。従って、他者とは、世界を私と分かちもつもう一人の現存在として私が世界において出会う存在である。メルロのここでの議論がおおむねハイデガー哲学の共同存在の思想を引き継ぐものであることは明らかだろう」として、現存在の共同性が道具と言語に端的に示されることを指摘している。

そのように考えると物や道具を扱うことは、それ自体が共同体や歴史との繋がりを回復するという治療仮説、あるいは人間性の回復仮説として捉えられる可能性が生じてくる。このことは第3章で指摘したように、身体からの疎遠、身体という場の喪失という課題を取り扱う統合失調症の精神病理とを併せて考慮すると、統合失調症者の作業療法の治療仮説として指摘できるのではないだろうか。

実存 生きられた瞬間

身体は道具や他者など外界に対して身を挺している。運動・感覚神経を周囲に投射し、意味の網の目を周囲に張り巡らし、身体図式⁸⁾を形成しているとメルロ＝ポンティは言うだろう。症例は次第にノコギリ動作を獲得していくが、習慣の獲得は運動による身体図式の組み替えである。意味に向けて材料や道具はそのつど

配置されるが、その際、私という主体的な意識が認識判断するというよりも、行為的に、運動志向的に意味付けられていくとメルロ＝ポンティは指摘している。この意味に向けて身を挺するあり方を、脳を介さない脊髄の反射弓にならって志向弓⁹⁾と呼んでいる。ノコギリ動作の一体性は、材料や道具、からだのいくつもの契機によって「意味」が大きく到来されたのであり、実存・生きられた瞬間として理解できるのではないだろうか。症例は当初の手元の慎重な取り組みから毎日の生活のリズムをかたち作り、そして症状を改善し、笑顔と前向きな姿勢、生活への態度作りへと経ている。実存・生きられた瞬間の到来は、医科学的な枠組みにおける心身状態の改善のみに留まらない、作業療法の人間的なアプローチの可能性を示しているのではないだろうか。

間身体性 超越論的構成の基盤

このようにノコギリ活動における身体は、個別的な各自性の壁をのりこえて、物や道具、他者にまで広がっている経験や在り方をなしえている。このような事態を間身体性¹⁰⁾とメルロ＝ポンティは呼び、生き生きと生きる作業の超越論的構成の基盤として位置付けられるのではないだろうか。

7. おわりに

本研究では、作業療法における統合失調症者の姿や病理を通して、現象学的な身体に着目することで、作業Occupationの超越論的構成の基盤について言及した。今後の課題について最後に記したい。

身体に埋め込まれているようなあり方を成している共同体としての身体については、ハイデガーの物や道具の指摘は重要であった。ハイデガーのいう現存在の理解は、メルロ＝ポンティの肉の共同体との関連において今後の課題としていきたい。

今回はノコギリ活動を例に挙げて検討したが、日常生活には多種多様な作業活動が展開され、それぞれに目指される意図や動作は多様であり、その多様性によって彩りのある生活が営まれている。統合失調症の治療援助の具体的な方法として、紹介した女性患者の場合は、スカート・手芸活動を通して幸運がもたらされたように、アンネが目の前に居たら、どのような作業を具体的に処方するだろうか。世界と出会うことで自分と出会い、信頼の

根を回復するには、どのような作業療法士の関与があり得るであろうか。今後は他の種目、諸活動についても、ひとつひとつ丁寧に検討を行っていきたい。

注

*1 受動的生成。現象学の創始者フッサールの記述した重要な基本概念として間主観性が指摘され、その生成を指す。世界の意味理解は、認識主体としての個人の能動的な主観においてなされるのではなく、複数の主観の共同化によって受動的に生成され、他者と共同体が構成される。間主観性では、事物の客観性を基礎づけるものが問われ、常識 (common sense) や「わかる」「できる」の発生の場として理解される。

引用文献

- 1) 熊野純彦著：メルロ＝ポンティ 哲学者は詩人でありうるか？、日本放送出版協会、2005、p50-52.
- 2) 上田敏著：リハビリテーションの思想 人間復権の医療を求めて、第2版、医学書院、2004.
- 3) 山根寛著：ひとと作業・作業活動、三輪書店、2005年.
- 4) W. ブランケンブルク著、木村敏、岡本進、島弘嗣共訳：自明性の喪失 分裂病の現象学、みすず書房、1978、p138-141.
- 5) 加藤敏著：統合失調症の語りと傾聴、EBM からNBMへ、第六章 精神病理学からみたりハビリテーション、金剛出版、2005年、p177～179.
- 6) M. メルロ＝ポンティ著、滝浦静雄、木田元共訳：見えるものと見えないもの、みすず書房、1989、p181-215.
- 7) モーリス・メルロ＝ポンティ著、ステファニ・メナセ校訂、菅野盾樹訳：知覚の哲学 ラジオ講演1948年、筑摩書房、2011、326-327.
- 8) M. メルロ＝ポンティ著、竹内芳郎、小木貞孝訳：知覚の現象学1、みすず書房、1967、p172-176.
- 9) M. メルロ＝ポンティ著、竹内芳郎、小木貞孝訳：知覚の現象学1、みすず書房、1967、p229.
- 10) M. メルロ＝ポンティ著、滝浦静雄、木田元共訳：見えるものと見えないもの、みすず書房、1989、p195.